

報告3

古代肥後の地方豪族と鞠智城

報告者紹介

溝口 優樹 (みぞぐち ゆうき)

国学院大学文学部史学科卒業。国学院大学大学院文学研究科博士課程修了。信州豊南短期大学非常勤講師、大手前大学総合文化部非常勤講師、大阪大学大学院文学研究科助教等を歴任。現在、中京大学教養教育研究院講師。博士（歴史学）。主な著書に、「日本古代の地域と社会統合」、論文に「凡河内国造の成立」「土師氏の系譜と伝承—野見宿禰を中心にして」、「地域からみた大野寺土塔の造営」等多数。専門は日本古代史。

古代肥後の地方豪族と鞠智城

中京大学講師 溝口 優樹

中京大学の溝口優樹と申します。私は、古代肥後の地方豪族と鞠智城というテーマでお話をさせていただきます。

はじめに

古代山城は、天智二年、六六三年における白村江の敗戦を受けて、唐・新羅の侵攻に備えて倭王権の主導によって築造された防衛施設だと言えます。現在の熊本県菊池市、そして山鹿市にまたがる米原台地に築かれた鞠智城も、そうした古代山城の一つです。ただし、鞠智城の立地は、やや内陸部に位置している。そこから有明海は望めない。こういう立地からは、対外防衛的な機能というものを疑問視する見方も少なくありません。

こうした疑問から提起されるようになってきたのが、現地の豪族を牽制するために鞠智城が築かれたのではないかとする説です。その一方で、鞠智城の築城が倭王権、あるいはそのものと筑紫大宰によって主導されたものだったとしても、労働力の編成などの面で現地勢力の協力というものは必要不可欠だつたと思われます。いずれにしても、鞠智城の機能とか、築城の背景とか、そういうものを考

えるうえで現地の勢力の存在というのは無視できないと思います。こうした問題に關して、今回の報告では、主に文字史料の分析によつて、肥後国、鞠智城がある菊池郡の一帯を菊池地域と呼びたいと思ひますが、特に菊池地域における豪族の動向、これを探つていつて、鞠智城が築かれた背景などを考えていただきたいと思います。

一 肥後国 の豪族

(一) 火国の国造

まずは、肥後国における豪族の概要を見て、いきたいと思います。

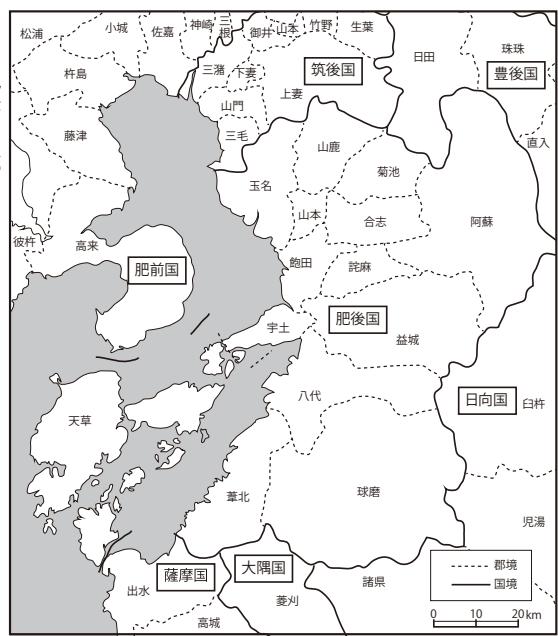
鞠智城の所在地、

これは律令制下の肥後国にあたるわけですが、

ここはもともと

肥前国と肥後国、

両者はもともと、



一体の火国という国を成していま

した。平安時代初期に編纂された

『先代旧事本紀』という書物があ

ります。その中の国造本紀を見て

みると、火国あたりの国造、これ

が8つほど登場します。この中

で、火国の名前を冠する火国造、

これが注目されるわけですが、火

国造は火君氏から輩出されます。

火君氏は、律令制下の肥前、それ

から肥後にまたがって分布してい

る。さらには、筑前なども含め

て、九州の広い地域に分布しています。これについては、火君氏の本拠地を肥後国の八代郡だと考

え、そこからほかの地域に広がっていったのではないか、分布を拡大していったのだろうという見方

が強いのですが、違った見方もできるんじゃないかなと思っています。というのは火国、肥前も含め

て、火国各地の豪族たちの集合体、各地の豪族が結集して火君という一つの豪族を形作っていたと考

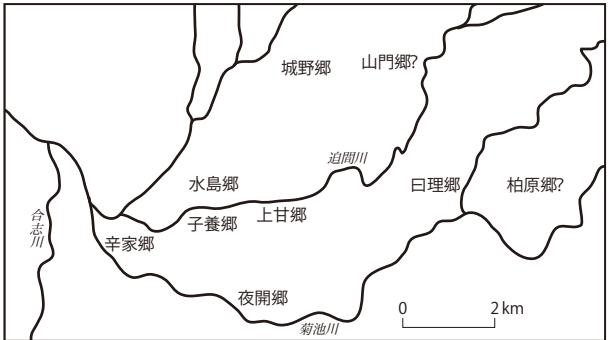


図2 菊池郡の郷配置

(国土地理院発酵20万分1地勢図「熊本」〈2005年測量〉をもとに作成)

地域	人名など	出典	備考
筑紫国	火君等祖(不知名)	『播磨国風土記』「飾磨郡条	經潤の地名起源説話、「筑紫国」は九州全土を指す可能性あり
筑前国	肥君猪手ほか	大宝2年(702)「筑前国嶋郡川辺里戸籍」 (『大日本古文書』1-9-142)「正倉院文書」正集三・八・一十九、總修六	猪手は大領
筑前国	肥公五百鷹	承和8年(841)「筑前国縣案」 (『平安遺文』第1巻、67号文書)「大宰府市史 古代資料編」史料(32)	大領
肥前国	筑紫火公貞直・筑紫火公貞雄	『続日本紀』嘉祥元年(848)8月壬辰(6日)条 「火公貞直」	忠世宿祢を賜姓。左京に移貫
肥前国	火君	『日本靈異記』下巻第36號	
肥後国	肥公馬長	延暦20年(801)「淨水寺「燈籠銘」(農野町教育委員会2004)	
(肥後国)八代郡	火君健緒鉈	『肥前国風土記』總記など	火国の地名起源および火君氏の祖先伝承
薩摩国(薩摩郡?)	肥君廣龍	天平8年(736)「薩摩國正税帳」 (『大日本古文書』2-186)「正倉院文書」正集四十三	主帳
薩摩国出水郡	肥君	天平8年(736)「薩摩國正税帳」 (『大日本古文書』2-200)「正倉院文書」正集四十三	大領

表1 火君氏の分布

郡	人名・氏族名	典拠	備考
玉名	日置部	日置郷の郷名から復元	
	日置部公	『日置氏墓誌』(松本1980年など)	權擬少領
山鹿			
山本			
菊池	泰人	鞠智城跡出土木簡(熊本県教育委員会2012)	郡名を記さないことから菊池郡の人と推定される
	大伴部島上・大伴部稻依	東大寺大仏殿廻廊西地区出土木簡1761(奈良県教育委員会2000)	子養郷の人。「薬院依住奉人」としてみえる
阿蘇	阿蘇君	『古事記』神武段など	郡名との一致から推定
	阿蘇直	『異本阿蘇系図』(田中1986)	阿蘇君氏との同族関係から推定
	穴穂部直	『異本阿蘇系図』(田中1986)	阿蘇君氏との同族関係から推定
	宇治部公・宇治部宿祢	『異本阿蘇系図』(田中1986)	阿蘇君氏との同族関係から推定
合志	日下部辰吉	『日本三代実録』貞觀18年(876)9月9日癸未条	擬大領
	壬生諸石	『日本書紀』持統10年4月戊戌(27日)条	
	鳥取部	鳥取郷の郷名から復元	
飽田	春日部	『日本書紀』安閏2年5月甲寅(9日)条	「火国春日部屯倉」の所在地として熊本市春日が比定されることから推定
	〔都々〕 建部君馬口	平城宮木簡(『平城宮木簡』1-300)	天平三年。主政
	建部君虫麻呂	天平勝宝6年(754)『瑜伽師地論』卷38奥書(『大日本古文書』25-171頁/石川寺所蔵)	
	建部公弟益	『続日本後紀』承和14年3月丙申朔条	長統朝臣賜姓・左京三条に移貫
	建部公貞雄	『日本三代実録』貞觀3年8月21日壬戌条	大領
	私部	私部郷の郷名から復元	
詫麻	津守部(?)	津守郷の郷名から復元	
益城	山稻主	『続日本紀』宝亀元年(770)10月己丑朔条	旧の山部
	肥公馬長	延暦20年(801)「淨水寺「燈籠銘」(農野町教育委員会2004)	
	真上日乙	延暦20年(801)「淨水寺「燈籠銘」(熊本県豊野町教育委員会2004)	真上=真斐部はもと白斐部
	大伴君熊凝	『万葉集』卷5-885	天平3年(731)相撲使の徒入として上京
	当麻部(?)	当麻郷の郷名から復元	
	宅部	宅部郷の郷名から復元	
	益木采女	二条大路木簡(『平城宮発掘調査出土木簡概報』31-20下(248))	
宇土	額田部君得万呂・額田部真鷦	天平勝宝2年「仕丁送文」(『大日本古文書』25-145頁/正倉院丹闕文書第94号)	大宅郷
八代	火君健緒鉈	『肥前國風土記』總記、『枳日本紀』所引「肥後國風土記」逸文	火国の地名起源および火君氏の祖先伝承
	火国造	『国造本紀』	八代郡火邑の地名から推定
	高分部福那理	『続日本紀』宝亀3年(772)10月戊午(11日)条	
	豊服広公	『日本靈異記』下巻第19號	豊服郷の人。宝亀2年の説話
天草	天草国造	『国造本紀』	郡名との一致から推定
	火草北国造	『日本書紀』敏達12年10月是歲条	
	葦分国造	『国造本紀』	郡名との一致から推定
	日奉部広主壳	『続日本紀』宝亀元年(770)10月己丑朔条	『続日本紀』宝亀3年10月丁酉(9日)条では「日奉公広主壳女」とみえる
葦北	家部嶋吉	『続日本紀』宝亀3年(772)10月戊午(11日)条	
	刑部広瀬女	『続日本紀』神護景雲2年(768)9月辛巳(11日)条	
	他田繼道	『続日本後紀』天長10年(833)3月丙申(9日)条	少領
	真斐部福益	『続日本後紀』天長10年(833)3月丙申(9日)条	真斐部はもと白斐部
	大伴部	伴郷の郷名から復元	
球磨	久米部	久米郷の郷名から復元	

表2 肥後の氏族分布

えてはどうかと、私は考えています。なお菊池地域なんですが、国造氏族の分布という点から見ると、分布からはずれている。火国のような国造たち、8つほどいるという話でしたけれども、こういった豪族たちと菊池の関係というのはいまいち、明確には見えてこないということが指摘できるかと思います。

(二) 肥後国 の氏族

次に、肥後国 の氏族分布の特徴を簡単に見ておきます（表2）。一つ指摘できるのは、君の姓を持つ氏族が多いということです。これは国造など、地域の有力な豪族を中心にして、それと政治的な関係を結んでいる豪族たちが同じ姓を持つ、そういうことだと考えられます。例えば、火君という豪族は君の姓を持っているので、それと関係を持っている豪族も同じく君の姓を持っている、こういったことです。

詳しいことは後程お話ししたいと思いますが、肥後国 の北部の豪族の場合は火君氏よりも、むしろどちらかというと筑紫君氏との結びつきの方が強いのではないかと考えています。筑紫君氏は筑後を拠点とする豪族だと考えますが、どちらも君の姓を持つています。おそらく、肥後の北部の豪族はそつちとの関係を築いて君の姓を持つている、そう考えたほうがいいんじゃないかという気がしています。なお、鞠智城が所在する菊池郡あたりには、久々智くくち、大伴部おおともべ、秦人はたびと、この3つの氏族の分布を復原することができます。

二 鞠智城周辺の氏族

(一) 久々智氏

次に、鞠智城周辺の氏族について具体的に見ていきたいと思います。まず取り上げますが、郡名。今は菊池というふうに言いますけれども、もともとは久々智くくちと呼んでいたようです。郡の名前と同じ久々智という名を持つ久々智氏を取り上げてみたいと思います。

この久々智氏ですが、文献史料では、畿内で活動が見られるのみなんです。地名からすると、今の兵庫県の尼崎市に久々知くくちという地名がありますので、おそらくそのあたりを拠点としていたと考えられます。もともと菊池地域を拠点としていた氏族と見て差し支えないだろうと思います。この久々智氏ですが、九世紀の初めごろに編纂された『新撰姓氏録』という書物に系譜が載つておりまして、それによれば、久々智氏は、大彦命おおひこのみことの子孫ということになっています。

実は筑紫国 の筑紫君氏、この豪族も大彦命の子孫だという系譜を持っている。そうしますと、同じ先祖の子孫であるという意識を持つていた。こういうものを同祖関係と言います。菊池郡には大伴部という氏族がいます。おそらくこの大伴部氏も大彦命の後裔氏族だろうと、つまり、同祖関係にある可能性が高いというふうに考えられます。

(二) 大伴部氏

次に、大伴部氏を取り上げていきたいと思います。図3は、東大寺の大仏鑄造に関わる八世紀半ば



図3 東大寺大仏殿回廊
西地区出土木簡
(奈良県教育委員会編2000)

頃の木簡です。薬院、つまり施薬院に所属する大伴部鳥上や大伴部稻依という人が大仏铸造の場に入る時の通行証か、あるいは、二人の勤務をチェックする札ではないかというふうに考えられています。この木簡によつて、大伴部を称する人が菊池郡の子養郷に属していた、ということが分かるわけです。ここで考えなければならないのが、大伴部の性格だと思います。大伴部というと大伴連氏、この大伴氏との関係というのが真つ先に想起されるかもしれないのですが、そうとも限らないと。実はこの大伴部というのは、大伴連氏に連なる大伴部もいますけれども、膳臣氏につながる大伴部もあります。仕事の内容が違つていて、大伴連氏に連なるほうは王宮の警護とか、そういう仕事に関わる。それに対して、膳臣氏に連なる系統の大伴部は、大王への食膳奉仕などに関係してくる。では、菊池郡の大伴部はどちらなのか、ということが問題になつてくるわけですけれども、同じ菊池郡にゆかりある久々智氏は、大彦命の後裔氏族でした。それを踏まえると、菊池郡の大伴部も大彦命の後裔氏族、つまり、膳臣氏に連なる大伴部と見たほうがいいのではないかと思います。

(三) 菊池地域と筑紫君氏

ここまで考えてきたところによると、菊池郡に分布が復原できる久々智氏、それから大伴部氏といふのは、いづれも大彦命の後裔氏族ということになります。ここで注目したいのは北部九州の有力豪族である筑紫君氏、これも大彦命の後裔氏族であるということです。大彦命の氏族は日本列島の各地に広く分布しているわけですけれども、北部九州における中心というのは筑紫国造、すなわち筑紫君氏です。おそらく久々智氏や大伴部氏は、筑紫君氏の勢力下にあつたことを背景として大彦命を先祖とする系譜、すなわち、筑紫君氏との同祖関係というのを持つに至つた、と考えるのがいいだらうと思ひます。

(四) 秦人氏

次は、菊池郡に分布する氏族として最後に取り上げることになる秦人氏です。図4は鞠智城跡の貯水池跡から出土した木簡です。これは秦人忍という人が負担した米の荷札木簡で、一緒に出てきた遺物の年代観から、七世紀後半から八世紀後半頃のものだというふうに見られています。この木簡の記載内容について留意されるのは、米を負担した人物が所属する郡と

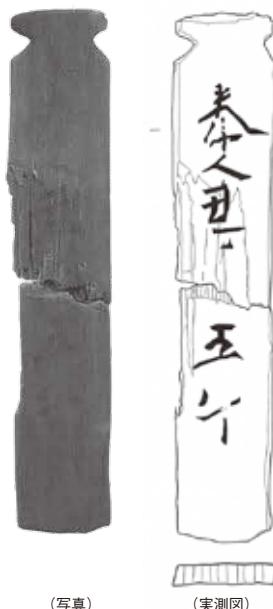


図4 鞠智城跡貯水池跡出土木簡
(熊本県教育委員会編2012)

か郷、そういうものの記載がないということです。このことにつきましては、すでに指摘がありますように、鞠智城が所在する肥後の菊池郡に属する人物からの貢進だったことを示す、そういうふうに言われているわけです。つまり、この秦人忍という人は、菊池郡の人だったということになるわけです。

この秦人につきましては、かつて様々な豪族の配下にあった渡来系の人々、そしてそれが王権直属の民として割き取られて、それから中央の秦氏のもとに編成された、そういう渡来人集団、渡来系の人々の集団であるというふうに言われています。

そうしますと、菊池郡の秦人につながっていく渡来人、こういった人々を連れてきた、招來した勢力は一体誰なのか、というところが問題になつてくるわけです。これまでの考察を踏まえると、菊池地域の秦人につながっていく渡来人、これを招來した豪族としては、筑紫君氏がもつともふさわしいのではないか、というふうに思います。

これは可能性ですが、磐井の乱を契機として、筑紫君氏の配下にあつたような渡来人集団が中央の秦氏のもとに再編成された、そういう可能性もあるのではないかというふうに思います。

おわりに

以上の考察結果をまとめつゝ、鞠智城の成立と地方豪族のかかわりについて考えていくたいと思ひ

ます。

第一に、国造クラスの豪族から見た場合、菊池地域は空白地帯と言つてもいいんじゃないかなと思います。ただし、豪族がいなかつたわけではないというところは留意が必要かと思います。これまでも、古代山城は在地勢力の主導によつて作られたものではないという指摘がありますけれども、そういった指摘とも親和的かなと思います。

第二に、菊池地域というのは、筑紫国造の配下にあつた久々智氏、それから大伴部氏の勢力圏であるということが言えます。こうした点からしますと、かつて、筑紫国造の配下にあつた有力者、こういった人々が鞠智城を擁する評の官人に編成された可能性が高いと思います。白村江の敗戦後、特段こうした勢力に対して牽制が必要になつたかと言われると、それは想定しにくいのかなというふうに思つております。むしろ、こうした勢力と鞠智城の築城の関係を考えるとすれば、築城を契機とした倭王権による地方豪族の編成、こういった意味を見出せるのではないかというふうに思います。

鞠智城を造るにあたつて、倭王権、それから筑紫大宰が、国造を介さずに、現地の中小豪族に協力させると。そうしますと、それによつて結果的に、倭王権、筑紫大宰による地域社会の掌握が進んでいったのではないか、そういう意義を見出せるのかな、というふうに思います。

第三点ですけれども、菊池地域は、筑紫国造のもとから倭王権の直接的な配下に再編成された秦人が居住する地域であるということ。ここからどういうことが考えられるのか、ということですけれど

も、秦人は国造のような地方豪族を介さずに、中央の王権が直接的に把握していたと言われておりますので、鞠智城を造るにあたって、倭王権、それから筑紫の大宰による労働力編成が比較的容易であったのだろうというふうに考えられます。

また秦氏といいますと、土木とか建築との関わりというのが注目されます。そうした点からすると、技術的な面から鞠智城の造営に関与した、そういう可能性も考えられるかもしれません。

以上、主に文字史料の分析によって、肥後国、特に菊池地域における豪族の動向を探り、鞠智城が築かれた背景を考えてきました。私の報告は以上です。

(図版出典)
熊本県教育委員会編
2012 『鞠智城跡Ⅱ』
奈良県教育委員会編
2000 『東大寺防災施設工事・発掘調査報告書 発掘調査篇』 東大寺